

ヘーゲル『大論理学』の研究 7

伊 藤 一 美

A Study of Hegel's „Science of Logic“

Kazumi ITOH

Abstract

Hegel explains that actuality is the unity of “Essence” and “Existence”. He investigates the meaning of this unity through various categories of actuality, possibility, contingency, necessity, causality, action-reaction and reciprocity.

These categories are based on the concept (substance, universality).

存在 Sein の根底には本質 Wesen がある。(存在論の結論) 本質にとって存在は、本質を欠くもの、仮象のように思われる。しかし仮象は本質に固有なものなのだ。それは本質の仮象、映現なのだ。こうした存在と本質との関係が本質の運動であり、この運動が反省 Reflexion だ。反省とは自己へと還帰することがその意味だ。しかし自己へと還帰するには還帰する出発点がなくてはならない。Reflexion (reflecto) は接頭語 re がついた flexion だから前提、つまり flectō, Flexion という前提があって Reflexion なのだ。だから本質とは自己を曲げて他者とし、また曲げかえて自己へと還帰するものなのだ。他者となりつつ自己自身でありつづけるものだ。自己のなかに他者をもつ、というけれども持っているだけではない。それでは持っているかどうかかわからない。自己を他者としてはじめて他者が自己のなかにあることがはっきりする。こういうものが本質だ。だから、本質は現象 Erscheinung する。本質が現象と一体となり区別がつかないように見える状態が現実存在 Existenz だ。直接的なもの Unmittelbare としての本質だ。これは存在するもの Existierendes、つまり物 Ding だ。まず物は現象にみえる。現象は諸性質からなる。物は諸性質の集合だということになる。しかし、諸性質の集合を成り立たせているものが見えてくる。法則 Gesetz だ。これが法則の世界、本質の世界だ。こうして現象 Erscheinung (現実存在) と本質とが対峙していることになる。しかし、両者は関係し合っているのだ (本質的相関 das wesentliche Verhältnis)。「現象しているものは本質的なものを指示しており、そして本質的なものはその現象のうちにあるのである⁽¹⁾。」こうして本質と現実存在とは統一される。これが現実性 Wirklichkeit である。

本質論 第三編

現実性 Die Wirklichkeit

現実性は本質と現実存在との統一である。そこにおいて形態なき本質と不安定な (根拠なき) 現象との真理がある。現実存在は根拠 Grund (本質 Wesen) から現われ出てきた直接的なもの Unmittelbares である。だからそれはまだ形式 Form を確立していない。本質との区別と同一性が明確になっていない。現実存在が自分をはっきりさせ (規定す bestimmen) れば、つまり、形式づければ、それが現象である。そしてこの他者への反省としてのみ規定された存立 die nur als Reflexion-in-Anderes bestimmte Bestehen、つまり現象が自己への反省 Reflexion in sich をなすと、つまり法則 (本質) となると、この存立は二つの世界 (現象の世界と法則の世界) になる。つまり内容のことなる二つの総体性となる。一方は自己へと反省したもので、他方は他者へと反省したものである。これら二つの世界の関係が本質的相関で、両者の形式関係という。この関係が完成されれば、内のもの Inneren と外のもの Äußeren との相関となる。二つの内容が一つの同一的基礎と形式の同一性に基づいたものであるという相関になる。この同一性が形式に関して生じているのだから、二つの差異性 (形式規定) は揚棄されている。両者は一つの絶対的総体性 eine absolute Totalität となっている。絶対的 absolute とは一つのものではなく、異なる二つのものが一体となっているということだ。

内のものと外のものととの統一はまず初めには絶対的現実性 die absolute Wirklichkeit であるという。絶対的現実性は ① 絶対的なもの das Absolute そのものである。現実性が統一として現にあり、この統一において形式が揚棄され、そして外のものと内のものととの

区別が消えているからだ。このとき、反省は絶対的なものにとっては外的反省となる。絶対的なものは、この外的反省を自分自身の運動であるかのようにみなしている。たしかに、反省は本質的に絶対的なもの *die Absolute* のなすことである。反省とは絶対的なものの自己への否定的復帰である。② 第二に、現実性は本来の現実性 *die eigentliche Wirklichkeit* である。それは絶対的なものの顕現 *Manifestieren* である。現実性 *Wirklichkeit*、可能性 *Möglichkeit*、必然性 *Notwendigkeit* からなる。これらは絶対的なものの形式的契機 *die formellen Momente* と絶対的なものへの反省をつくる。

③ 第三に、現実性は絶対的相関 *das absolute Verhältnis* である。これは絶対的なものとその反省との統一となる。それは自己と相関する絶対的なものとだ。つまり実体の登場である。

1 絶対的なもの *Das Absolute*

〔絶対的なものの矛盾と開陳〕 絶対的なものは単一な、しっかりとした同一性であるが、この同一性はいまだ無規定的なものだ。つまり、この同一性は本質と現実存在の統一であるが、その統一が存在一般にすぎず、反省の規定もすべて解消している。絶対的なものが何であるかという規定が欠落している。絶対的なものがあらゆる述語の否定として、空虚なものとしてのみ現われている。しかし絶対的なものはあらゆる述語の肯定でもある。だから絶対的なものはあらゆる述語の矛盾 *der formellste Widerspruch* として現われる。否定と肯定（措定）とが外的反省関係にある。そのかぎり、絶対的なものの呈示は不可能である。絶対的なものを呈示する方法は規定することでも、外的反省でもない。それは開陳 *Auslegung* である。絶対的なものの固有の開陳である。絶対的なものが何であるかを示すことだ。

A 絶対的なものの開陳 *Die Auslegung Des Absoluten*

〔絶対的なものの不充足性〕 絶対的なものは存在でもあれば本質でもある。存在は反省していない直接的なもの *die erste unreflektierte Unmittelbarkeit* であり、本質は反省した直接的なもの *die reflektierte Unmittelbarkeit* である。両者はそれ自体で総体性であるが、しかし規定された総体性 *eine bestimmte Totalität* である。前編である本質論第二編では本質と存在との関係は内なるものと外なるものとの相関まですでに進んだ。内なるものは本質だ。しかしそれは総体性として存在に関係づけられており、直接的存在だ。外的なものも存在だ。だが、反省に関係づけられているが本質との直接的な相関を欠いた同一性であるという規定をもったものだ。絶対的なものとは両者の絶

対的統一だ。絶対的なものはさきの第二編の本質的相関の根拠である。ただこの本質的相関がそこではまだ同一性へと還帰しておらず、その根拠が定立されていなかったということだったのだ。

〔絶対的なものの概念〕 このことから次のことが明らかとなる。絶対的なもの（の規定）は絶対的形式（絶対的統一）であるが、次のような同一性 *Identität* ではない。その諸契機（内のもとの外のもの）が区別もなく単に一つだという同一性ではない。その諸契機がそれ自身総体性で、形式に関しても無関心でそうしたものが絶対的なものの内容であるという、そういう同一性だ。しかし逆に絶対的なものは絶対的内容である。だからそれは内容としては無関心な多様性なのだが、しかし否定的形式関係をそれ自体においてもっているから、このことで内容の多様性は一つのしっかりとした同一性となっている、そういった絶対的内容である。

絶対的なものの同一性は絶対的同一性である。それはそれぞれの部分が全体であり、それぞれの規定が総体性であるからだ。つまり規定性一般が仮象となり、規定性一般が自分の定立された存在（絶対的同一性）において消えゆく区別となっている。絶対的なものにおいては形式は自己との単一な同一性であるから、絶対的なものは自己を規定しない。というのは規定するとは形式区別であるからだ。しかし、絶対的なものはすべての区別や形式規定一般を含んでいるから、つまり絶対的形式であり、また反省でもあるから、内容の区別は絶対者のもとで現われる。

しかし絶対的なものは絶対的同一性である。これが絶対的なものの規定だ。現存し、現象する世界、あるいは内的総体性と外的総体性の全多様性は絶対的なものにおいては揚棄されている。絶対的なものにおいてはいかなる成もない。というのは絶対的なものは存在ではなく、自己反省する規定でもないからだ。また自己を自己においてのみ規定する本質ではないからだ。絶対的なものは自己発現 *ein Sich-Äußern* でもない。内のもとの外のものとの同一性であるからだ。ここでは区別が眠らされている。

〔開陳〕 こうして反省の運動は絶対的なものの絶対的同一性に対立している。この運動はこの絶対的同一性において揚棄されており、同一性の内のもものにすぎず未展開である。だからいまは、この運動は同一性にとって外的である。——この運動はそれゆえにまず絶対的なものにおいて、その行いを揚棄することで成立する。この運動は多様な区別と諸規定の彼岸であり、この彼岸は絶対的なものの背後にある。それゆえこの運動は多様な区別や諸規定をとり上げるが、同時にそれらが没落する運動でもある。この運動は絶対的なものの否定的な開陳である。

この開陳は一つの肯定的側面をもっている。すなわ

ち有限なものが没落することにおいて、絶対的なものに関係づけられているという本性、ないしは絶対的なものをそれ自体のもとに含んでいるという本性を証明するかぎりだ。しかし、この側面は絶対的なものの開陳であるよりも諸規定の開陳である。つまり諸規定は絶対的なものを根拠としてもっており、諸規定や仮象に存立を与えるものは絶対的なものであるということの開陳だ。仮象は無ではなく反省であり、絶対的なものへの関係だ。換言すれば、仮象が仮象であるのは絶対的なものが仮象において仮象するからだ。この肯定的開陳は有限なものが消失するのをひきとどめ、それを絶対的なものの表現と模写とみなす。しかし、有限なものは全体的な消失において終る。しかし、有限なものは媒体 ein Medium であり、それによって映現するものによって吸収される媒体である。

それだから絶対者の肯定的開陳は映現である。というのは真に肯定的なものは開陳とその内容を含んでおり、絶対者そのものであるからだ。だからこの開陳することはこれの絶対的なものへの関係によって生じる絶対的に行いであり、絶対的なものへと帰ってゆく。しかし、開陳の出発点は多様な区別、多様性、諸規定であるから、その出発点にしたがえばこの行いは絶対的に行いではない。というのはこの出発点は絶対的なものにとっては外的な規定であるからだ。

〔絶対的なものは属性〕 絶対的なものは絶対的同一性として規定されている。それは反省によって対立や多様性に対してそのように措定されている。ということは、絶対的なものは反省の否定であり、規定の否定だということだ。それゆえ、絶対的なものがかの開陳だけでなく、絶対的なものそのものが不完全だということだ。つまり、かの絶対的なものはただ絶対的同一性であるにすぎず、外的反省の絶対的なものにすぎない。自己自身の展開として対立や多様性を展開しうるものではない。だから、かの絶対的なものは絶対的なものの絶対的なもの das Absolut-Absolute ではなく、ある規定における絶対的なものである。それは属性 *Attribut* だ。絶対的なものの本質的性質にすぎない。

しかし、絶対的なものが属性であるのはそれが外的反省の対象であり、外的反省によって規定されたものであるからだけではない。換言すれば反省は絶対的なものにとって外的であるだけではない。そのように外的であるゆえに、反省は絶対的なものにとって直接的に内的である。というのは、絶対的なものは存在と本質との同一性であり、内のものと外のものとの同一性(統一)であるからだ。この点では絶対的なものは絶対的形式である。区別のある同一性だ。この形式が絶対的なものを自己のうちに映現させ、絶対的なものを属性と規定する。

B 絶対的属性 *Das absolute Attribut*

〔絶対的なものと属性〕 絶対的に絶対的なものという表現は、自分の形式において自己へと還帰している絶対的なもののことだ。その形式がその内容に等しい。また属性とは相対的に絶対的なもののことだ。絶対的なものの本質的性質だ。スピノザでは思惟と延長が神の属性だった。つまり属性とは一つの形式規定のうちにある絶対的なものを意味している。

たしかに絶対的なものは絶対的形式におけるものだ。そのかぎり一定の形式におけるそれだということになる。形式は一般によく規定された形式であり、否定一般だ。絶対的なものはいまや「或る規定の中にある絶対的なもの」⁽²⁾、「或る形式規定のなかにある絶対的なもの」⁽²⁾ だ。こういう絶対的なものは属性である。

属性は絶対的なものの内容である。スピノザが神という実体の属性を思惟と延長ということからも明らかだ。ここでは、絶対的なものの内容は総体性だ。属性は総体性だ。属性である総体性が絶対的なものの真かつ唯一の存立として定められている。だがしかし、このとき絶対的なものの規定、絶対的同一性という規定は非本質的なものとなる。

単一な絶対的同一性とは同一性の規定のうちの一つだ。規定には一般に他の規定が結合されうる。たとえば多くの属性とも結びつけられる。しかし、絶対的同一性とはすべての規定が揚棄されているという意味であり、また絶対的同一性は反省であるが、その反省をも揚棄されているという意味である。だから、この同一性のもとではすべての規定が揚棄された規定として定められている。換言すれば、総体性は絶対的総体性として定められている。属性は絶対的なものを自分の内容や存立としている。ということは絶対的なものと属性とは同じものとなっている。この区別は仮象だ。「絶対的なものの形式規定は、それによって絶対的なものが属性であるのだが、その形式規定はたんなる仮象として措定されている⁽³⁾。」この仮象は否定的なものとしての否定的なものだ。開陳が属性によって自分に与えるのは肯定的仮象である。その仮象は属性が属性であることを揚棄する。こうしたことを開陳は制限のうちにある有限なものをそれ自体で自立的に存立するものとしてはとらえず、その存立を絶対的なものへと解消し、そして有限なものを属性とすることによってなす。有限なものを無限なものの限定として把握しなおすことによってなす。開陳は属性と自分の区別する行いとを単一な絶対的なものに沈める。

〔属性は様式〕 したがって、反省は区別することから絶対的なものの同一性へと帰ってゆく。が同時に自分の外面性からぬけて真に絶対的なものへと至っていない。反省は無規定的な抽象的な同一性に達した

にすぎない。換言すれば、反省は内的形式・絶対的の同一性でもって絶対的なものを規定して属性としたのだから、この規定するということは外面性とは関係のないものだ。つまりこの内的規定が絶対的なものを貫徹していない。外面化していない。だから、絶対的なものの発現は単に定め置かれたものとして絶対的なもののもとで消失すべきものとなってしまった。属性は無的なもの、外的仮象、単なる様式（あり方）Art und Weise にすぎない。

C 絶対的なものの様態 Der Modus des Absoluten

属性は第一に絶対的なものではあるが、自己との単一な同一性にある。第二に属性は否定である。それは否定として自己への形式的な反省である。前者は属性が絶対的なものだということを意味し、後者は属性が様態だということを意味している。両側面はさしあたり属性の両極である。両側面の媒辞は属性そのものだ。属性は絶対的なものであれば規定性でもあるからだ。

〔様態〕 第二の極は否定的なものとしての否定的なものである。真に否定的なものだ。同時に絶対的なものにとって外的な反省である。あるいは第二の極が絶対的なものの内なるものとしてとらえられれば、そして否定としての否定の働きが、絶対的なものを否定して自己を様態として定めれば、そうすると様態は絶対的なものの自己外存在、絶対的なものが存在の可変性と偶然性へと喪失することであり、自己へと復帰することなしに絶対的なものが反対のものへと移行してしまうことになる。それは総体性を欠いた形式と内容諸規定の多様性である。単なる様態そのものとなってしまふ。絶対的なものへの反省ではなく、発散となる。

様態はこれだけではない。様態は外面性と定められた外面性である。たんなる様式 Art und Weise であり、仮象そのものである。様式が外面性であり、仮象だとすれば、何の外面性、仮象なのか。絶対的なもののそれである。だから仮象のかげで絶対的なものの形式への反省がおこなわれていたのだ。それは自己との同一性であり、絶対的なものである自己との同一性である。様態とは絶対的なものの外面性だ。「実体の変状」だ。そして様態においてはじめて絶対的なものは絶対的の同一性として定められた。また絶対的なものは自己が自己へと関係する否定性であり、仮象と定められた仮象である。

〔開陳〕 それゆえ、絶対的なものの開陳はそれの絶対的の同一性からはじまり属性へと、またそこから様態へと移行する。しかし、第一に開陳は諸規定を否定す。しかも開陳は反省そのものである。だから絶対的なものは真に絶対的の同一性である。第二に開陳は外的なもののかかわりでなすのではない。様態は絶対的なものの仮象としての仮象であるから、本来の自己への復

帰である。そしてこの復帰は様態が自己自身を解消する反省である。このような反省をなすものは絶対的なものだ。絶対的なものは絶対的存在だ。——第三に、開陳する反省は自分自身の諸規定と外的なものからはじめるように見える。様態、つまり属性の諸規定はいつも絶対的なものの外にみいだされるものとしてとりあげられているようにみえる。そして反省が成立するのは、反省が様態や属性の諸規定を無差別な同一性へと導きかえすことによってであるようにみえる。しかし、実際、この反省は絶対的なもののなかからはじまる。反省は様態や諸規定を絶対的なもののなかにもっている。というのは、最初の無差別的の同一性としての絶対的なものは、規定された絶対的なものであり、属性にすぎないからだ。一定の規定性をもっているものだ。この規定性は、規定性だから反省に属している。この反省によって、絶対的なものは外的なもの、様態となりつつも、自己へと反省し、絶対的なものでありつづける。第一と第二とが、第三において統一されている。

〔様態の真実〕 様態の真の意味は、様態は絶対的なものの反省する固有の運動だということだ。様態は規定することであるが、それによって絶対的なものが他者となることでなく、絶対的なものがすでにあるということを開示することだ。様態は透明な外面性で、それは絶対的なものを示すことだ。これは自己から外に出る運動である。しかし、外への存在が dies Sein-Nach-Außen が同様に内面性そのものである。そしてまた定めることでもある。単に指定された存在ではなく、絶対的に存在を指定する。

しかし、開陳が示すことは形式と内容との区別は絶対的なものにおいて解消しているということだ。このことは、絶対的なものが、自己を顕示することだ。絶対的なものは絶対的形式である。つまり絶対的なものはそれ自身分裂でありながら自己と同一的である。絶対的なものは否定としての否定的なものである。

絶対的なものは自己自身を開陳する。また様態として自己自身との絶対的の同一性である。かかる絶対的なものは発現である。しかし内のものでない。他者に対する発現でもない。発現は自己自身のために自己を絶対的に顕現することだ。こうした絶対的なものは現実性なのだ。

2 現実性 Die Wirklichkeit

〔現実性と顕現〕 現実性は反省した絶対性である。それゆえ、現実的なものは自己を顕現 Manifestation する。それは自己を外面化することだ。反省した絶対性だから、自己を外面化することで自己なのだ。すなわち現実的なものは自分の外面性においてそれ自身であり、つまり自己から自己を区別し規定する運動にお

いてのみ自己自身である。

〔現実性の概念〕 いまここであるこの現実性とは諸契機が揚棄されまたは形式的な契機としてあるにすぎず、いまだ実在化されていないというような現実性だ。諸契機もさしあたり外的反省に属しており、この現実性の内容として規定されていない。

〔現実性の展開〕 現実性は内のものと外のものという両形式が直接的に統一されたもので直接的なものだ。その意味では自己への反省という規定に *gegen* している。換言すれば現実性は直接的なものであるから可能性に *gegen* する現実性だ。現実性に対応する概念は可能性である。両者の相互関係それ自体は第三のものである。それは、現実性と可能性とであるもの、現実性で可能性であり、可能性で現実性であるものだ。内のもので外のものでもあるものだ。それは、自己へと反省した存在と規定されている現実的なもので、しかもこの自己へと反省した存在が直接に現実存在するものとして規定されているものだ。これが第三のものだ。必然性 *Notwendigkeit* がそれだ。

だが、現実性が可能性で、可能性が現実性だというのは現実的なものと可能的なものとは形式的な区別である。だから、はじめに両者の関係は偶然性 *Zufälligkeit* において成立しているにすぎない。

こうして、偶然性において現実的なものと可能的なものとの規定が獲得された。このことによって両者はそれぞれの規定を獲得している。このことによって、第二に実在的現実性が生じた。それとともに実存性可能性と相対的必然性との現れた。

相対的必然性が自己へと反省すると絶対的必然性となる。これが第三のもので、絶対的可能性であり、絶対的現実性である。

A 偶然性、または形式的現実性、形式的可能性、および形式的必然性

Zufälligkeit oder Formelle Wirklichkeit, Möglichkeit und Notwendigkeit

1〔現実性〕 現実性は反省した絶対性で、直接的なもの（外のもの）と反省したもの（内のもの）とを契機として内包している。このように現実性は内のものと外のものという形式 *Form* の総体性であるべきだ。しかし、最初に現われる現実性は直接的なものでしかない。絶対的形式の一契機にすぎない。それゆえ、現実性は形式的 *formell* である。形式の総体性ではない。ただ現実性は存在あるいは現実存在一般より以上のものだ。しかし、現実性は本質的には単なる直接的現実存在ではなく、即自存在あるいは内面性と外面性との形式統一 *Formeinheit* である。だから現実性は即自存在または可能性を直接に含んでいる。現実的であるものが可能的である。

2〔可能性〕 可能性は自己へと反省した現実性であ

る。しかし、このそれ自身が最初に反省した存在 *dies selbst erste Reflektiertsein* は形式的なもの *das Formelle* である。それだから自己との同一性という規定であり、即自存在一般という規定である。

しかし、この規定は形式の総体性だから、その即自存在は揚棄されたもの、あるいは本質的に現実性への関係のうちにのみあるものだ。またこの即自存在は現実性の否定的なものであり、否定的なものとして定められている。だからこの可能性は二つの契機を含む。第一に肯定的契機である。それは自己自身へ反省した存在であるという意味だ。しかし、この契機は直接的なものと反省したものを含む絶対的形式からすれば、反省したものだけだから一契機へとおしきげられている。この自己へと反省した存在は本質とは認められない。第二に否定的な意味をもっている。つまり、可能性は欠陥をもっており、現実性のもとで補完される。

〔肯定的側面から〕 肯定的側面からすれば可能性は自己との同一性という単なる形式規定である。あるいは本質性 *Wesentlichkeit*（内的存在）の形式で、可能性一般である。こうして、可能性は無規定的なあらゆるものを入れる入れもの一般である。これが形式的可能性である。その意味では自己に矛盾しないすべてのものは可能的である。可能性は限界なき多様性である。しかし、あらゆる多様性はそれぞれであり、他者に対して限定され、そしてそれ自身のもとに否定をもっている。こうした、一般に無関心的差異性は対立へと移行する。しかし、対立は矛盾である。それゆえ、すべてのものは矛盾したものであり、不可能といえるものだ。

形式的可能性は浅薄で空虚である。A が可能的であるとは A は A であるということだけだ。これでは、形式的な同一命題と同様、何とも語っていない。

〔否定的側面から〕 そうはいっても可能的なものは、単なる同一命題以上のものを含んでいる。可能的なものは反省した自己反省存在 *das reflektierte In-sich-Reflektiertsein* である。換言すれば、総体性の契機としての同一的なものであり、即自的であるべきではないと規定されている同一的なものだ。だから、この反省した自己反省存在は可能的なものにすぎないという第二の規定をもつ。形式の総体性であるべしという当為をもつ。絶対的形式であるべしという当為をもつ。絶対的形式とは区別された二項である形式が統一されていることで、いま可能的なものはそうならない。その点が否定的側面だ。絶対的形式では、本質そのものはただ契機であり、存在なしにはこの形式は真理をもたない。可能性はたんなる内的存在（本質）である。したがって、可能性は契機にすぎず、絶対的形式にかなっていない。可能性はそれ自身において矛盾である。可能性は不可能性だ。

このことは次のようなことだ。可能性は定められた形式規定である。それは揚棄されたものとしてある内容をもっている。この内容は可能的に即自存在だ。その即自存在は揚棄された即自存在、あるいは他在である。したがってこの内容は一つの可能的な内容であるから、他の内容やその反対の内容でありうる。A は A であり、 $\neg A$ は $\neg A$ である。これらの二つの命題はそれぞれ内容規定の可能性を表わしている。可能性は総体性の反省だから、その規定のなかに反対も可能である。可能性は関係づける根拠である。ということは $A=A$ であるから $\neg A=\neg A$ であるということだ。可能的な A のなかに可能的な $\neg A$ が含まれている。この関係そのものが両者を可能的と規定する。

だが、可能性はこのかぎり矛盾である。それゆえ、可能性は現実性になる。

3〔偶然性〕 1 の結論は現実性は可能性を直接に含んでいるものだということであった。2 では可能性はその内的矛盾からして現実性にならなければならない。両者は一つのものとならざるを得ない。

可能性と現実性との統一は偶然性である。偶然的なものは一つの現実的なものである。だが、それは同時に可能的なものとして規定されている現実的なものである。また自分の他者ないし反対のものと同じく存在するというような現実的なものである。この現実性はそれ故、単なる存在か現実存在である。しかし定められた存在であり、可能性という価値をもっている。逆に可能性は自己への反省であり、即自存在で、定められた存在である。可能性は自己へとひきさがっている。可能的だから存在しているという意味で現実性であるともいえる。可能的なものは、偶然的な現実性としての価値だけをもつ可能性は文字どおり可能性なのだ。

偶然的なものは二つの側面を示す。第一に偶然的なものは直接的な現実性だ。というのは、偶然性は可能性を直接的にそれのものにもっているからであり、また可能性が偶然的なものにおいて揚棄されるからだ。こうして、偶然的なものは、措定された存在でもなく、また媒介されてもおらず、直接的な現実性である。偶然的なものはいかなる根拠もたない。——この直接的な現実性は可能的なものに属しているから、可能的なものは現実的なものと同じように偶然的として規定されており、同様に根拠をもっていない。

第二に偶然的なものは現実的なものであるが、たんに可能的なものとして、あるいは定められた存在としての現実的なものである。ということは、偶然的なものにおいて可能性は自己を現実化し、現実的なものとなりうるということだ。措定された存在となる。だから現実的なものに支えられて可能的なものはあり、可能的なものをもって現実的なものはある。だから両者は、それら自体では絶対的ではなく、その真の自己へ

の反省を他者のうちにもっている。つまり、偶然的なものはその意味で根拠をもっている。

偶然的なものはいかなる根拠をもっていない。偶然的だから。また同様にそれは根拠をもっている。偶然的だから。偶然的なものは内のものと外のものと、あるいは自己へと反省した存在と存在との定められた、媒介されていない、相互に転化しあう運動である。この相互転化は可能性と現実性とがそれぞれそれら自身のもとにこの規定（内のものと外のもの）をもっていることによって措定された。また、それら両者が絶対的形式の契機であるということによって措定された。——こうして、可能性との直接的統一のうちにある現実性は現実存在にすぎず、根拠なきものとして規定されている。根拠なきものとは、たんに措定されたもの、あるいはたんに可能的なものにすぎないものだ。——あるいは現実性は反省したものに対して、可能性に対して規定されたものだから、可能性から、また自己へと反省した存在から分離されている。このように可能的なものとの間で存立しているのだから、現実性はまた直接的に可能的なものにすぎない。——同様に可能性は、単一な即自存在として直接的なものであり、存在するもの一般にすぎない。あるいは現実性に対立していて、また現実性を欠いた即自存在であり、可能的なものにすぎない。しかし、それゆえに自己へと反省していない存在一般である。

両規定の転化してやまない非静止が偶然性である。それぞれの規定は対立している規定へと転化する。それゆえ、それぞれの規定は対立する規定において自己自身と合体する。ここに一方の他方における同一性が定められている。この同一性が必然性である。

〔必然性〕 必然的なものは現実的なものである。必然的なものは直接的なもの、根拠を欠いたものである。だがまた必然的なものはその現実性を他者によって、あるいは自分の根拠のうちにもつ。しかし同時に必然的なものはこの根拠によって措定された存在であり、この根拠の自己への反省である。だから、必然的なものの可能性は揚棄された可能性である、根拠となっている。それゆえ、偶然的なものは必然的である。というのは、可能性が根拠となり現実性が被根拠となっているからだ。つまり、現実的なものは可能的なものと規定され、そうすることで現実的なものの直接性が揚棄され、可能性が根拠、即自存在となり、現実性が被根拠となり、両者がつきはなされているからだ。必然的なものは存在する。存在するものはそれ自身必然的なものである。同時に必然的なものは即自的である。この自己への反省は存在というかの直接性とは別のものだ。存在するものの必然性はひとつの他者である。この即自存在はそれ自身が措定された存在であり、揚棄されており、それ自身直接的である。こうして、現

実性は自分とは区別されたもの、つまり可能性において自己自身と同一的である。このような同一性として現実性は必然性である。

B 相対的必然性または実在的現実性、実在的可能性、実在的必然性

Relative Notwendigkeit oder Relative Wirklichkeit, Möglichkeit und Notwendigkeit

1〔実在的現実性〕 前述の必然性は形式的である。というのは必然性の契機が形式的だからだ。すなわち、単一な両規定が直接的に統一されているが、一方の契機の他方の契機への直接的転化というかたちで統一されているのであり、両者共に自立性の形態をもっていないからだ。それゆえこの形式的必然性においては、統一は一であり、統一の中に区別があることに関しては無関心である。この必然性は両規定の直接統一として現実性である。しかし、この現実性は一つの内容をもっている。無関心的同一性としてのこの内容は、無関心的な、すなわち単に差異された両規定としての形式を含んでいる。この内容は多様な内容一般である。この現実性が実在的現実性である。

実在的現実性はさしあたり多くの性質をもった物であり、現実存在する世界である。しかしこの実在的現実性は現象へと解消しない。この現実性は現実性として即自存在であり、自己への反省である。実在的現実性はたんなる現実存在の多様性のなかで自己を維持する。この現実性の外面性は自己自身への内面的かわり innerliches Verhalten だ。これが顕現である。現実的であるものは作用することができる。あるものはそれが何かを産出することによってあるものの現実性を告げる。あるものは他者へ働きかける Verhalten ことによってそれをなす。これが顕現である。それは移行ではない。移行とは存在するあるものが他者へと自己を当てはめる beziehen ことだ。現象でもない。現象とは物が他の物との相関の中にのみあり、そのなかで自立的なものである。しかも自立性を他の自立的なものうちにもっている。

実在的現実性は、それ自身のもとに直接的に可能性をもっている。この現実性には即自存在の契機が含まれている。しかし、ただやっとの直接的統一であるこの実在的現実性は形式の両規定の一方のうちにある。こうして存在するものとして即自存在、または可能性から区別されている。これが実在的現実性だ。

2〔実在的可能性〕 実在的可能性は実在的現実性の即自存在として、さしあたりは内容にみちた即自存在である。

だから実在的可能性は直接的現実存在である。それ自身のもとに多様性をもっている。実在的可能性は多様性だ。

したがって、現にここに存在するこの多様性は可能

性でも現実性でもある。両者の同一性が内容だ。しかし、その内容とは形式諸規定に対して無関心である内容だ。それゆえ、形式諸規定はそれらの同一性(内容)に対立している。—— そのように実在的可能性は諸制約の全体をなしている。それは自己へと反省していない分散した現実性である。しかし、それは即自存在であるが、だが他者の即自存在であり、そして自己還帰すべきものである、と規定されているものだ。

第一に、実在的に可能的であるものは、それが即自存在であるという点では形式的同一的なものである。この同一的なものはその単一な内容規定からして自己矛盾していない。また、自己矛盾してはならない。第二に、この同一的なものは、多様であり、多様な関連のうちにある。この差異性是对立へと移行する。この同一的なものは矛盾したものだ。これは自己揚棄し、没落する。それ故可能的である。実在的可能性は自己を揚棄するが、揚棄される二重のものをもっている。それは現実性と可能性とである。(1) 現実性は形式的現実性ないしは現実存在である。これは自立的な直接的な現実存在だ。それは揚棄によって反省した存在に、他者の契機になる。即自存在を得る。(2) かの現実存在は可能性あるいは即自存在として規定されていた。しかし他者になる即自存在であった。それ(即自存在)が自己を揚棄することで、この即自存在も揚棄されて現実性へと移行する。—— これが自己自身を揚棄する実在的可能性の運動で、すでに現存している現実性と可能性という両契機を生みだす。ただそれぞれの契機を他の契機から生みだす。現実性が可能性になり、可能性が現実性になる。それぞれの契機が自己自身と合体する。これが実在的可能性の特徴だ。諸制約の集まりが自己を揚棄することで、それは即自存在となる。この即自存在は実在的可能性そのものである。実在的可能性はすでにある他者の即自存在としてあるそういった即自存在だ。逆に、こうすることで実在的可能性の即自存在の契機が自己を揚棄する。だから、実在的可能性は現実性となる。つまり、実在的可能性は契機となる。実在的可能性と実在的現実性との相互転化は実在的必然性を成立させる。

3〔実在的必然性〕 実在的可能性の否定は実在的可能性の自己との同一性である。実在的可能性はその揚棄においてこの揚棄を自己自身につきかえすのだから実在的可能性は実在的必然性である。必然性であるものは別のものでありえない。しかし、一般に可能的であるものは別のものである。だが、実在的可能性はそれが他の契機を、現実性を自分のもとにもっているから、すでにそれ自身必然性である。実在的可能性と必然性とは見かけだけの区別である。必然性は同一性である。それは、すでに前提されており根底にある同一性だ。だから実在的必然性は内容にみちた関係である。

というのは、内容はかの即自存在する同一性であり、形式区別に対して無関心である同一性だからだ。

しかし、この必然性は相対的でもある。必然性の一つの前提をもっている。自分がそこからはじまる前提である。必然性是对概念である偶然的なもののもとに自分の出発点をもっている。しかし、偶然的なものが、ここではまだ必然性と一体となっていない。だから、この必然性は相対的だ。それはこういうことだ。実在的に現実的なものそのものは規定された現実的なものだ。そして、この実在的に現実的なものは、さしあたり直接的存在という規定性をもっている。それは諸事情の多様性だ。しかし、この直接的存在とは規定性であるから、それ自身の否定的なものでもあり、即自存在の可能性である。こうして、実在的に現実的なものは実在的可能性となる⁽⁴⁾。こうして現実性と可能性の統一としてこの実在的可能性は形式の総体性である。しかし、自己にとってまだ外的な総体性である。それが可能性と現実性との統一であるのは次のようにである。(1) 多様な現実存在は直接的にまた肯定的に可能性である。というのは、この多様な現実存在が現実的なものだからだ。(2) 現実存在がこのように肯定的可能性であるとすれば、この可能性は可能性のみとして規定され、現実性はその反対のものへと直接に転化する。それは偶然性だ。そうであるとすれば、この可能性は或る他者の可能性としての即自存在である。直接的現実性を自分のもとにもっていることになる。そのことによって実在的可能性は必然性となる。しかし、この必然性は可能的なものと現実的なものとが自己へと反省していない統一から始まる。前提(相対的なもの、偶然性)することと自己(絶対的なもの、必然的なもの)への還帰とはまだ分離されている。——換言すれば、この必然性はいまだ自己を自己自身から偶然性と規定していない⁽⁵⁾。

しかし、実在的必然性の相対性は内容のもとで次のように表わされる。内容は形式に対して無関心な同一性であり、それ故形式から区別され、規定された内容一般である。実在的必然性は、それゆえ何らかの制限された現実性である。この現実性はこの制約のために他の観点においてまた偶然的なものにすぎない⁽⁶⁾。

実際に実在的必然性は潜在的には偶然性である。実在的に必然的なものが、形式に関しては必然的なものであるが、内容に関しては制限されたものであり、この内容によって偶然性をもつというように現われる。実在的必然性のなかには偶然性が含まれている。というのは、すでに示したように実在的可能性は潜在的に必然的なものであり、この実在的可能性は現実性と可能性との相互に対する他在としてあるからだ。この他在だという点に実在的必然性は偶然性を含んでいる。この必然性は現実性と可能性との相互に対するかの静

止なき他在から自己への復帰である。しかし自己自身から自己への復帰ではない。

したがって潜在的には必然性と偶然性との統一である。この統一は絶対的現実性と名づけられるべきものである。

C 絶対的必然性 Absolute Notwendigkeit

〔絶対的必然性の生成〕 実在的必然性は規定された必然性である。必然性が自分の否定、すなわち偶然性を自分のもとにもっているからだ。

しかし、規定された必然性はその最初の単一性においては in ihrer ersten Einfachheit 現実性である。それゆえ、この必然性は現実的な必然性である。現実性は自分のなかに即自存在である必然性を含んでいる。だから現実性それ自身がそのまま必然性である。だから、この現実性は他のものではありえないような現実性である。このような意味で、この現実性は絶対的現実性 absolute Wirklichkeit である。

しかし、これとともにこの現実性は空虚な規定にすぎない。というのは、この現実性は絶対的であること、すなわちそれ自身が現実性と可能性との統一であるとされているから。この現実性は偶然性といえるものであるからだ。つまり、この現実性を単なる可能性となすこともあれば、同様にまた他のものであるようにしうし、また可能的なものと規定もしうるからだ。この可能性はそれ自身絶対的可能性である。というのは、この可能性は可能性とも現実性とも規定されうるものだからだ。この可能性は自己自身に対する無関心性である。ということによって、この可能性は空虚な偶然的な規定となってしまう。こうして、実在的必然性は偶然性である。実在的必然性は潜在的に偶然性を含んでいる。

しかし、それだけではない。偶然性が実在的必然性のもとに生成する、直接的存在となる。それは外面性(直接的存在)だ。しかも、外面性(外のもの)は内のものにすぎないから、この外面性は偶然性の即自存在である。しかし、この成は偶然性そのものの成でもある。換言すれば、実在的必然性ももっていた前提(偶然性、現実性と可能性との直接的統一)は実在的必然性自身が指定したものだ。というのは、実在的必然性としてこの必然性は現実性が可能性において揚棄されたものだからだ。そしてまたその逆でもある。したがって、この必然性は両契機の単一な肯定的な同一性でもある。というのは、この必然性が一方の契機の他方の契機への単一なる転化であり、両契機のおのおのは、すでに示したように他方の契機において自己自身と合体するのだからである。

こうして、実在的必然性は現実性である。とはいっても、形式の自己自身との単一な合体でもある。あるいは現実性の可能性における自己自身との合体でもあ

る。そういった現実性である。実在的必然性がかの両契機を否定的に措定することは、このことによってそれ自身が前提となっている。換言すれば、自分自身を揚棄された必然性として措定することであり、あるいは直接性として措定することだ。だから、自分自身を前提していることになる。

だが、まさにこの点で現実性は否定的なものと規定される。この現実性とは実在的可能性であった現実性から出て自己と合体することだ。したがって、この新しい現実性は自分の即自存在、つまり自分の否定からのみ生成する。——このことによって、この新しい現実性は直接的に可能性であり、自分の否定によって媒介されたものだ。しかし、この媒介をなしたものは可能性だ、といってもいい。両者の相互媒介・相互転化となっているから。その媒介においては即自存在、すなわち可能性そのものと直接性（現実性）の両者は同じ仕方では措定された存在である。——ということは、この媒介は必然性であるということだが、それは措定された存在を揚棄し、ないしは直接性（現実性）と即自存在（可能性）との措定であるとともに、まさにそこにおいてこの揚棄を措定された存在として規定するという必然性である。それゆえ、この必然性は自己を偶然性として規定する当のものである。——「自分の存在において自己を自己からつきはなし、このつきはなしにおいてのみ自己へと還帰している。そして、自己の存在としてのこの復帰において自己を自己自身からつきはなししている⁽⁶⁾。」

〔絶対的必然性生成のまとめ〕 こうして、形式は自己を実在化するにあたって自分のすべての区別を貫き、自己透明にした。形式は絶対的必然性として自分の否定において、あるいは本質において存在と自己自身との単一な同一性である。——内容と形式そのものとの区別は消失した。というのは、かつての可能性の現実性におけるあるいは、その逆におけるかの統一は、規定性としての、あるいは措定された存在としての自己自身に対して無関心であったからだ。あるいはまたこの統一は内容にみちた事柄であり、この事柄のもとでは必然性の形式は外的関係にとどまっていたからだ。しかし、あの統一は可能性と現実性という両規定に対して無関心的な両規定の反省的同一性である。それだから、あの統一は措定された存在に対する即自存在という形式規定である。そして、この即自存在・可能性は内容の被制限性をなしており、この内容を実在的必然性もっていた。内容と形式の区別はあった。しかしいまや、この区別が解消された。それが、絶対必然性であり、絶対的必然性のなかで自己を貫く区別が絶対的必然性の内容をなす。

〔絶対的必然性の概念〕 絶対的必然性は真理である。それは、現実性と可能性一般とが、同時に形式的

必然性と実在的必然性とがそこへと還帰してゆく真理である。絶対的必然性は、存在の否定において、つまり本質において自己自身と関係している。絶対的必然性は単一な直接性であり、純粋な本質である。絶対的必然性は、存在と本質との両者が一つ、同一のものであるということだ。——この必然性はいかなる制約も根拠ももたない。その存在は単一な自己への反省だ。この必然的なものは反省として根拠と制約をもつ。しかし、それは自己をのみ根拠と制約としてもっている。この必然的なものは即自存在だ。しかし、その即自存在はそれの直接性である。その可能性はそれの現実性だ。「したがって、それは存在するがゆえに存在する。存在と自己とが合体している絶対的に必然的なものは本質だ。この単一なるものは直接的単一性だから、絶対的必然的なものは存在だ⁽⁷⁾。」

〔絶対的必然性の運動〕 絶対的必然性は絶対的なものの反省であり、形式だ。すなわち、存在と本質との統一であり、絶対的否定性である単一な直接性である。それゆえ、一面ではこの絶対的必然性の区別は反省規定としてあるのではなく、存在する多様性として相互に自立した他者という形態をもつ区別された現実性としてある。他の面では、絶対的必然性の関係は絶対的同一性であるから、この関係は現実性と可能性との絶対的相互逆転である。——「それゆえ絶対的必然性は盲目である。一面では現実性と可能性は存在として自己への反省という形態をもっている。それゆえ、両者はともに自由な現実性としてある。どちらも他方へは映現せず、他方への関係の痕跡を自分のもとに示そうとしない。それぞれは自分のなかで根拠づけられており、自分自身のもとで必然的なものである。この必然性は本質であるが、この存在のうちにとじこめられている。それだから、これら二つの現実性の相互による接触は空虚な外面性として現われる。一方の他方における現実性はただの可能性、すなわち偶然性である⁽⁸⁾。」というのは、存在は存在とのみ同一的である存在として措定されているからだ。また本質は端的にただ可能的なものとして空虚なものとしてあるからだ。

しかし、この偶然性はむしろ絶対的必然性である。それはかの自由な、潜在的に必然的であった二つの現実性の本質である。それらの現実性は純粋に自己においてのみ根拠づけられていて、別々に形成されおり、自己を自己自身に対してのみ顕現するからである。つまり自分以外に根拠をもたないという存在である。——しかし、両存在の本質はそれらのもとに現われるのであって、この本質が何であり、それらの現実が何であるかを開示する。それはこれらの存在の単一性（本質）が絶対的否定性であるからだ。この否定的なものがそれらのもとにとび出てくるのだ。というのも存在が自分の本質との矛盾であるからだ。しかも、この否定的

なもの(本質)は存在という形式にあるこの存在に対立している。それゆえ、この否定的なものはかつ二つの現実性の否定として、それらの無として、それらに対立している自由な他在としてあるからだ。それらの現実性は一つの内容であり、それだから区別された現実性であり、規定された内容である。それは必然性がそれらの現実性におしつけた目印である。その目印はこの必然性が自分の規定において自分自身へと絶対的に復帰するその時おしつけられる。そしてそのときそれらの現実性は没落する。これは規定性の真理の顕現である。この顕現は自己自身への否定的関係であり、他在における盲目的没落だ。映現と反省は、存在するもののもとでは成であり、存在の無への移行である。逆にまた、存在は同じく本質であり、そして成は反省であり、映現である。「こうして外面性はその内面性であり、それらの関係は絶対的の同一性である。そして、現実的なものの可能的なものへの移行は自己自身との合体だ。偶然性は絶対的必然性である。偶然性自身が、かの最初の二つの絶対的現実性を前提することだ⁽⁹⁾。」

〔実体〕「同一性とは存在が自分の否定において自己自身と同一であるということだが、この同一性は実体である。それは自分の否定における、換言すれば偶然性における統一だ。この同一性は自分自身の関係として実体である。必然性の盲目的な移行はむしろ絶対的なものの固有の開陳、絶対的なものの自己における運動である。絶対的なものは自己の外化において、むしろ自己自身を示す⁽⁹⁾。」

3 絶対的相関 Das absolute Verhältnis

〔映現〕絶対的必然性は相関である。なぜなら、それはまず区別することであるからだ。区別によって両契機が出来る。これらの契機はそのものとして存立している。しかもこの二つの存立は一つの存立である。だから絶対的必然性は相関なのである。区別は絶対的なものの開陳を映現することである。——本質は反省であり、映現である。しかし、絶対的相関である本質は映現 Scheinen そのものである。この映現は本質が自己と関係することである。だから映現は絶対的現実性である。絶対的なものは、いまや絶対的形式として、換言すれば必然性として自己自身を開陳する。絶対的なものそのものの開陳とは絶対的なものが自己自身を措定することだ。そして、絶対的なものとはこの自己措定そのものだ。顕現とは絶対的なものが自己自身と等しい絶対的現実性だ。

絶対的なものの開陳は絶対的必然性である。というのは絶対的必然性とは絶対的なものが自己自身を規定することだからだ。絶対的必然性は映現するものであり、映現として措定されてあるものだ。この相関の両側面は総体性である。というのは区別されたものは映

現としてそれ自身であり、また自分の反対のものであり、こうしてそれらは全体でもあるからだ。逆に、それらは総体性であるから映現である。絶対的なものが自己を区別し、あるいは映現することは絶対的なものが自己を措定することだ。

この相関は、まず第一に実体 Substanz と偶有 Akzidenzen との相関である。それは絶対的映現の消失と、生成とである。第二は因果性の相関だ。ここでは実体は自己をある他者に対するものとしつつも自己を失わないものとされている。向自存在と規定する。最後に、この相関が自己のあり方にも関係するものとなる。これが交互作用だ。ここで絶対的相関が措定される。この措定された統一が概念である。

A 実体性の相関 Das Verhältnis der Substantialität

〔実体と偶有性〕絶対的必然性は絶対的相関だ。というのは、絶対的必然性は実体の自己自身との絶対的媒介だからである。実体は本質と存在との最後の統一である。実体は直接的現実性そのものである。しかし、またこの直接的現実性は自己へと絶対的に反省した存在であり、自立的なものである。——実体は存在と反省との統一で、本質的に映現と措定された存在(それによってつくられたもの)である。映現とは実体が自己へと関係することであり、こうしてそれは存在する。この存在は実体そのものだ。逆に、この存在は自己と同一的な措定された存在であり、映現しつつある総体性である。だから実体は偶有性である。偶有性は実体に付随しているもので、実体の表面で変化するものだ。

〔映現〕映現とは可能性と現実性との統一である。この統一ははじめには偶然性であった。しかし、ここでの統一は偶有性の運動だ。偶然性は可能性と現実性との直接的相互転化であった。——しかし、ここでは存在するのは映現である。可能性と現実性との関係は同一的な、あるいは相互に映現しあう反省である。これが偶有性の運動だ。偶有性の運動はそれら両契機のそれぞれのもとに存在のカテゴリーと本質の反省諸規定がたがいに入りまじって映現する。——直接的な或るもの Etwas (存在のカテゴリー) はひとつの内容(反省諸規定の一つ)をもっている。それが直接性としてあることは形式(反省諸規定)に対しては全く無関心な反省した無関心性であるということだ。この内容はひとつの内容だから規定されている。この内容は存在を規定している規定である。だから、その或るものは直接的な或るものではない他者へと移行する。しかし、いまここで生じた質(他者)は反省の規定である。「こうして質は無関心的な差異性だ。しかし差異性は自分を対立へと高揚させ、根拠へと帰ってゆく。根拠は無である。しかしまた自己への反省でもある。この自己への反省は自己を揚棄する。しかし、この反省はそれ

自身が反省した即自存在であり、可能性である。そして、この即自存在は自己への反省であるそれがなす移行において必然的な現実的なものである⁽¹⁰⁾。」

偶有性のこの運動は、実体の現動性 *Aktualität* で、実体自身が静かに現出することだ。実体は自分に対してのみ活動的である。前提されたもの（自己）を揚棄することは消えてゆく映現だ。しかし直接的なものを揚棄する行いのなかではじめてこの直接的なものが生じる。つまり、かの映現することが存する。自己自身から始まるということはこの自己を措定することである。

〔実体〕 実体は映現する同一性であるが、全体の総体性でもある。実体は偶有性を自己のうちに包括している。そして、偶有性は全実体そのものである。実体は区別をもつ。つまり、存在の単一の同一性と諸偶有との区別をもつ。諸偶有はこの同一性のもとで交替する。これが実体が映現する形式である。存在の同一性は表象（観念）がとらえる形式なき実体である。表象にとっては映現は映現として規定されていない。表象は、無規定的同一性に、それを絶対者とみなして固執する。しかし、それは真理をもたない。それは直接的現実性の規定性、また即自存在あるいは可能性の規定性にすぎないような無規定的な同一性である。

他方の規定、諸偶有の交替は、実は偶有性の絶対的な形式統一（形式の絶対的統一）である。この統一は、絶対的力としての実体である。偶有が消滅するということは現実性としての偶有が、自分の即自存在としての自己、つまり自分の可能性としての自己へと帰ってゆくことだ。しかし、この偶有の即自存在はそれ自身措定された存在だ。それゆえ、この即自存在は現実性でもある。そして、この形式諸規定は同じく内容諸規定でもあるから、この可能的なものは内容からすれば規定された現実的なものだ。実体は自分の内容をともなった現実性によって、自己を創造的な力として顕わす。この現実性とは実体が可能的なものをそれへと移す現実性である。また、実体は自分が現実的なものを、そこへとひきもどす可能性によって、破壊的な力として自己を顕わす。だが、両者は同一的である。創造は破壊であり、破壊は創造だ。けだし、否定的なものとの肯定的なもの、可能性と現実性とは実体的必然性において絶対的に合一されているからだ。

諸偶有そのものは、相互にいかなる威力をもたない。それらは、多様な諸性質をもつ現実存在するものだ。あるいは諸部分から成る全体であり、自立的な諸部分であり、相互に誘発を必要とし、たがいに制約し合っている諸力である。ひとつの偶有が他の偶有をこえる威力を行使するように見えるのは、実体の威力である。実体は両偶有を自己のうちに包括し、自らは否定性として、両者を不等なものとして措定する。一方を消滅す

るものとして、他方を他の内容を持ち、かつ生成するものとして規定する。—— 実体は形式と内容とのこの区別（両偶有）へと永遠に自己を二分割し、そして自己をこの一面性から総体性へと永遠に純化する。しかし、この純化そのものにおいて規定（生成と消滅）と二分割へと逆もどりしている。—— それで、偶有は自己に固有な実体（存立） *ihr eigenes Subsistieren* が形式と内容との総体性そのものであるということでの偶有を追いける。しかし、自分と他者とがこの総体性のなかで没落す。

このように実体が諸偶有と直接的な同一性にあり、また諸偶有のなかにあるために、まだ両者のいかなる区別も存在していない。この最初の規定においては実体の全概念が顕現されていない。だが実体は自己と同一的な絶対的存在 *Anundfürsichsein* である。その実体が諸偶有の総体性としての自己自身から区別されるならば、そのとき実体は威力として実体と偶有へと自己を媒介するものである。この威力としての実体は必然性である。このことは諸偶有的なものを否定するなかで、実体が肯定的に持続することだ。そして、また実体の存立のなかで諸偶有的なものの措定された存在があるということだ。「実際、実体は諸偶有の内なるものにすぎない。諸偶有は実体のもとにのみある。これが本当だ。換言すれば、この相関は成として映現する総体性である。しかし、この総体性は反省である。偶有性はそれ自体では実体であるが、まさにそのゆえにまた実体として措定されたものだ。そのように偶有性は自己自身に関係する否定性として、自己に対立して規定されており、同時に自己自身に関する単一なる自己との同一性としても規定されている。だから、偶有性は向自存在的な、威力のある実体だ。こうして、実体性の相関は因果性の相関へ移行する⁽¹¹⁾。」

B 因果性の相関 *Das Kausalitätsverhältnis*

実体は威力である。自己へと反省した威力である。諸規定を措定し、かつこれから自己を区別する。実体は自分を規定するなかで、自己自身と関係するが、こうして実体は自分を否定的なものとして措定するものそのものである。また自分を措定された存在とするものだ。この措定されたものは結果である。しかし、自己に向かって *für sich* 存在する実体は原因である。

この因果性の相関は、さしあたり形式的因果性の相関だ。

a 形式的因果性 *Die formelle Kausalität*

1 〔実体の顕現〕 原因は結果に対して根源的なものだ。—— 実体は威力として映現するものであり、偶有性をもつ。偶有は措定されたものだ。しかし、実体の規定活動は偶有性から出発するのではない。つまり、偶有性はあらかじめ他者であり、いまはじめて規定性として措定されるかのように偶有性から出発するのでは

ない。両者(実体と偶有性)は一つの現動性 *Aktuosität* である。実体は威力として自己を規定している。実体は規定されたものだ。実体は直接的なものであり、かつすでに自己が規定されたものだ。実体は自己を規定することで、このすでに規定されたものを規定されたものとして指定す。そうすることで実体は指定された存在を揚棄し、自己自身へ還帰している。—— 逆に、この復帰は実体の自己への否定的関係であるから、この復帰そのものは規定することであり、あるいは実体が自己から自己をつきはなすことだ。この復帰によって規定されたものが生成する。復帰はこの規定されたものから始まる。そして、この規定されたものはいまやそのように指定されたように見える。—— このような絶対的現動性は原因である。絶対的現動性は顕現 *Manifestation* としての実体の威力だ。この顕現は偶有を直接的に偶有の生成において開陳し、それを指定されたものとして指定す。つまり結果とする。—— したがって、結果は第一に実体性の相関の場合の偶有性である。すなわち、指定されたものとしての実体である。しかし、第二に偶有は自分が消えてゆくことによるのみ実体的である。しかし、結果としては偶有は指定されたものであり、自己と同一的なものだ。「原因は結果のなかで全実体として顕現される。つまり、指定された存在としての指定された存在そのもののもとで自己へと反省したものとして顕現されている⁽¹²⁾。」

2 [原因と結果の同一性] この自己へと反省した指定された存在(偶有)に実体は指定されたものではない根源的なものとして対立している。実体は絶対的威力として自己への復帰であるが、しかしこの復帰そのものが規定活動であるから、実体はもはやその偶有のものではない。実体は偶有の即自存在として指定されている。だから、実体はまず原因として現実性を有する。しかしこの現実性は結果である。というのは、この現実性とは実体性の相関においてこの実体の即自存在、実体の規定性が規定性として指定されているということだから。それ故、実体は自分が原因としてもつ現実性を自分の結果のうちにのみもつ。—— このことが必然性であり、それが原因だ。結果は原因の他者である。根源的なものに対する指定された存在であり、根源的なものによって媒介されている。しかし原因は必然性として、この媒介活動を揚棄する。そして、原因は自分の自分を規定する活動において、自己へと復帰する。というのは結果は原因と同一的だからだ。それゆえ、原因はまずその結果において真に現実的なものであり、自己同一的なものである。—— それだから結果は必然的である。—— このような必然的なものとしてのみ、原因そのものが動かすものであり、自己から始めるものであり、自己から現出する自立的な源泉である。原因の根源性とは次のことだ。「原因の自己へ

の反省が規定する指定活動 *bestimmendes Setzen* であり、逆に両者(原因と結果)は一つの統一である⁽¹³⁾。」

だから一般に、結果は原因が含んでいないものを含まない。また逆もいえる。原因とは結果をもつという規定そのものだ。結果は原因をもつというこのこと以外のいかなるものでもない。原因そのもののうちには、その結果があり、結果のうちには原因がある。

3 [因果性の消滅] ここに原因と結果との同一性が成立している。こうして、原因だ、結果だという形式がなくなる。原因は結果のうちに消える。結果も消える。けだし原因なしに結果はないからだ。結果は原因の規定性だからだ。ここに結果のなかで消え去った因果性がある。これは直接的なものだ。直接的なものは原因と結果との相関に対して無関心である。相関が外的なものとなっている。

b 規定された因果性 *Das bestimmte Kausalitätsverhältnis*

1 [因果性は分析命題] 形式的因果性ではただ原因と結果という形式からだけ因果性をみた。そこでは原因と結果の同一性をみた。同一性で原因と結果は消滅した。しかし、この同一性とは内容である。原因も結果も内容をもっている。内容の面から因果性をみてみよう。内容は規定されたものとして差異された内容である。そして原因は、その内容にしたがって規定されており、それとともに結果も規定されている。—— 内容は現実的な、しかし有限な実体だ。

いまやこのことが、因果性の相関で、それは実在性 *Realität* と有限性 *Endlichkeit* とのなかにある因果性の相関だ。つまり、有限な因果性だ。有限な因果性は与えられた内容を持ち、そして同一的なもののもとでの外的区別という状態のなかにある。その同一的なものとは実体である。

内容のこの同一性によってこの因果性は分析命題である。同じ一つの事柄が、一方では原因として、他方では結果として示される。形式の諸規定(原因と結果)が外的反省であるから、ある現象を結果として規定し、それを説明するために結果からその原因にまでのぼってゆくが、それは主観的悟性の同語反復的な考察である。ただ同一の内容がくりかえされるだけだ。人は原因のうちに結果のうちにあるものとは別のものを決してもちはしない。—— たとえば雨は湿りの原因である。湿りは雨の結果である。—— 「雨がしめらせる」とは分析命題である。雨と同じ水が湿りである。雨としての水はただ自立的な事柄の形式のうちにある。これに反して水は水分、また湿りとしては付加されたもの、指定されたものである。指定されたものとは自分の存立を自分自身のもとにはなんらもっていないものだ。そして、いずれの規定も水にとっては外的である。

原因となるものは結果として現われないものをもつ

ている。たとえば、画家はいろいろの色とそれらの色を結びつけて絵画にする以外にもっと別の内容をもっている。しかし、これらのほかの内容は偶然的な付加物であり、それは原因となんらかかわりない。画家がほかにどんな資質をもっているかということはこの絵にはかわりない。彼の諸性質のどれが結果において現われるかが、彼のなかでの原因である。彼の残りの諸性質に関しては彼は原因ではない。したがって、因果的相関は同語反復なのだが、ここに注意されねばならないことがある。それは結果にとって遠いと思われる原因である。同語反復ではないとみえるときだ。原因が多くの中間項を経て結果となるため、かの同一性をおおいかくす。こうして多くのものが原因となり、結果に結晶することになる。

つぎには自然的有機的生命の相関と精神的生命の相関とに因果性の相関が不当に適用されることがある。ここでは、原因が結果以外の他の内容をもつことが示される。しかし、それは生物体に作用するものが生物体によって自律的に規定され、変化させられ、転化されるからだ。また生物体が、原因がその結果へと至ることを許さないからだ。すなわち、生物体は原因としての原因を揚棄するからだ。精神的生命の相関も同様だ。一般に歴史においては精神的諸集団と諸個人とが相互に関係しあい、相互規定しあう。精神の本性は、他の根源的なものを自己の中にうけ入れず、換言すれば或る原因を精神のなかで連続させないで、むしろ原因を中断し、かつ転化することもある。——しかし、いかなる相関も理念に属し、理念のもとで考察されるべきだ。——ここでは次のことが注意される。それは、結果は原因より大きくないということだ。というのは結果は原因の顕示以上のいかなるものでもないからだ。ただ、大きな結果はより大きな内的精神・理念によって生ずるものだ。「一本のしなやかな葉柄から広大な形姿を出現させるかの唐葉模様として歴史をえがくことは、それゆえたしかに精神に富んでいるが、しかしきわめて皮相的だ。大きなものの小さなものからのこうした発見は因果性の相関を揚棄する⁽¹⁴⁾。」

2〔因果性の悪無限性〕 こうした見方は、大きな影響をもつ。因果性の相関とは内容と形式とを別々にみる立場であった。原因・結果という形式とそれらの相関の内容とを関連づけられない立場であった。しかし、原因が結果ということはそれぞれの内容にかかわることだ。原因の内容が雨で、結果の内容が湿りであったりする。原因と結果とは別の内容だ。だから、内容は形式の区別、原因と結果のちがいを身につけており、差異されている。しかし、内容がこう異なるとはいえ、因果性の相関では原因と結果とは同一内容(水)なしには因果性は成立しない。しかし、ここではそうしたことが正しく結合出来ない段階である。だから、雨とい

う原因と湿りという結果は外的にしか結びつけられるだけとなる。こうして、雨と湿りという内容は相関に入りこまないことになる。

したがって、これら外的内容は相関していない。一つの直接的現実存在だ。それぞれは原因の、そして結果の即自存在的同一性 *die ansichseiende Identität* であり、直接的な存在的な同一性 *unmittelbare, seiende Identität* である。だから、これはなんらかの物であり、多様な諸規定をもっているなんらかの物だ。だから、この物はなんらかの観点で原因であれば、ある物は同様に結果である。しかし、これらの物は同一な基体 *Substrat*、本質的存立 *wesentliches Bestehen* をもっている。原因・結果は物においてそれらの基体をもっている。形式規定(原因と結果)は特殊な存立 *ein besonderes Bestehen* なのだ。

しかし、この物は基体であるだけでなく、実体でもある。さらに、この実体は有限な実体である。というのは、この実体は直接的なものだからだ。しかし、実体は同時に因果性をもつ。実体は相関をつらぬく同一性そのものだからだ。——ということは、この基体は原因として自分に否定的に関係する。しかし、第一にこの原因としての基体は指定された存在である。基体が直接的に現実的なものとして規定されるからだ。——第二に基体にとって因果性は外的である。だが、基体は原因となっているから自己を失っている。だから、自己自身を、また外的な因果性を否定しなければならぬ。これが結果を生む働きが始まりで、実体が結果を生む働きはこのようにして始まる。この働らきが自己を外的規定から解放する。それは、実体の自己への復帰だ。それは、実体の直接的現実存在、およびその指定された現実存在を揚棄することである。このことは因果性一般を揚棄することでもある。

運動する石は原因である。この運動は石の一つのあり方、一規定だ。そのほかに石は多くの規定をもつ。色、形とか。これらの規定は石の原因性にかかわりない。石の直接的現在存在は原因であることとは離れている。外的なことだ。だから、石の運動とそこで成立する因果性とは石につくり与えられたものだ。——しかし、因果性は石の固有の因果性である。このことは石の実体的存立が、それ自体では不動のものである(自己への同一的關係)ということのうちにある。⁽¹⁵⁾ しかし、この自己への関係は因果性においてはいまや指定された存在として規定されており、それゆえこの関係は同時に自己への否定的関係である。——こうみると石の因果性とは石の指定された、外的あり方を否定し自己へと還帰することにある。石の因果性は自分の抽象的根源性(動かぬ石)を回復することである。——雨は湿りの原因だ。しかし、ともに水である。水は雨として原因となっている。これも、水をして他者がそのよう

に規定するから雨となっている。他の力が水を空気中におしあげ、塊りとし水を落下さす。水が地上から離れることは水の重さにとって疎遠なことだ。だから、水が原因となることはこの疎遠な規定を除去し、自己との同一性を回復することだ。また、水の因果性を揚棄することだ。

以上は因果性の第二の規定、規定された因果性で、それは形式にかかわっている。この相関は外的因果性だ。しかし、根源的な因果性だ。因果性にとって根源的なことである。というのは、それが因果性のもとで指定されたものであり、因果性の帰結だからだ。基体のもつ対立する諸規定が、たとえば雨と湿りが水で合一するということは、原因から原因への無限の背進をつくる。——「それは結果から始まる。そのとき結果は結果として原因をもっている。この原因はふたたび原因をもつ。等々⁽¹⁵⁾」原因はなぜ再び原因をもつか。それは原因が有限なもので規定されたものだからだ。結果に対するものだからだ。一規定であり絶対的に不変なものではないからだ。こうして原因は否定(結果)を自分の外にもつ。これによって、原因は自分を規定し、有限となり、自分の規定性をもつ。このかぎり、原因は指定された存在であり結果である。このとき、これら両者の同一性が指定されている。しかし、それは第三のもの ein Drittes で直接的な基体 das unmittelbare Substrat である。こうして、因果性は外的であり、その根源性が直接性であるということになる。それゆえ、形式の区別とは因果性の第一の規定のことであり、規定性として指定された規定性ではなく、この区別は存在する他者の関係だったのである。これが、有限な反省のなすことだ。つまり、① 有限な反省は直接的なもの、直接的基体にとどまり、形式の統一をこの直接的基体においてなそうとしない。こうして、この反省はこの直接的基体を原因にしたり結果にしたりする。他面では ② この反省は、形式の統一を因果の無限系列とすることでごまかす。有限な反省はどちらかをなすにすぎない。このことは、この反省の無力を示している。

結果についても同じことがいえる。結果から結果への無限進行をつくりだす。それは結果が原因となり、その原因が他の結果をつくる、……となる。

規定された原因は、水にとっては外的なものである雨で、それは結果(湿り)となるが、これで自己を喪失する。つまり、因果性は結果において終る。だが、結果は基体(水)へと到る。これは実体でもある。自己自身へと関係している。この基体のもとで指定された存在(原因)が指定された存在(結果)になるのだから、実体のなかにひとつの結果が指定されていることになり、実体が原因となる。しかし、最初の結果(湿り)は実体から直接にもたらされる第二の結果(湿り)

とは別のものだ。それが実体の自己への反省だからだ。実体は原因として結果を内包しているからだ。第二の結果においては原因(水)は結果においての原因たりうる。——しかし、規定された因果性であるここでは、因果性は外的原因から始まるのだから、結果においても外的になる。因果性は還帰しない。消える。この結果は別の実体としての基体(たとえば樹木)のもとでの指定された存在(たとえば樹液の構成要素⁽¹⁶⁾)となる。しかも、別の実体によってつくられたものとなる。ここでは、別の実体(樹木)が原因となる。結果、つまり別の実体によってつくられたものは、この別の実体にとって外的なものとなる。こうして、この因果性は悪無限的なものとなる。

3 [前提としての基体(実体)] いまや規定された因果性の相関によって何が生じているのか。

規定された因果性によって、原因が結果のなかで再び生成す。結果は原因のなかで消失するが、しかし原因において再生す。この原因と結果は自己自身を指定することにおいて自己を揚棄し、そうした自己揚棄において自己を指定する。基体から基体への因果性の外的移行が現存しているのではない。この因果性では、他になることが因果性の固有な指定活動となっている。したがって因果性は自己自身が前提されており、あるいは自己を制約する。だから因果性は自己が原因と結果とになるべきものとしてある。それゆえ、以前の即自的同一性(即自存在)、つまり基体は前提となっている。つまり基体は結果を生じる因果性に対立して指定されている。さきにはこの即自存在、同一的なものにとって外的でしかなかった反省が、この同一的なものとの相関にある。

c 作用と反作用 Wirkung und Gegenwirkung

[受動的実体と結果を生じる実体] 形式的因果性を考察した結果、そこでの原因と結果とに共通する一つの同一性が見つけ出された。それが因果性の相関の実体である。こうして、因果性とはその実体が自己においておりなす活動だということになった。しかしこの実体的同一性は、形式的因果性の相関からみれば外的な他者である。この外的な他者である実体的同一性から因果性の相関が始まるのである。だから、それが原因である。ということは、それを前提していることになる。「因果性は前提する行いである⁽¹⁷⁾。」前提されているのだからそういうように制約されていることになる。「原因は制約されている⁽¹⁷⁾。」原因は原因となるべきものとされている。こういう制約のなかで因果が始まる。だから、「原因は前提されたものとしての、外的な他者としての自己へ否定的に関係することだ」となる。原因は制約されており、他方自己へ否定的にかかわり、制約をこえるべきものだ。しかし、ここでは原因は前提である。これに、こうした自己に否定的に関

係するとは原因を前提としているものが、原因を外的なものとしているものがあることになる。制約するものがあることになる。それが偶有性の威力 *die Macht der Akzidentalität* だ。「この実体（原因）には偶有性の威力が実体的活動そのものとして対立しているのだ⁽¹⁸⁾。」この外的他者、偶有性の威力も実体である。こうして外的他者は受動的実体 *die passive Substanz* ということになる。こうして、受動的実体と結果を生じる実体 *die wirkende Substanz*、自己が自己へ否定的に関係する実体 *die als negativ sich auf sich beziehende Substanz* とが対立していることになる。「受動的実体は後者の制約だ。つまり、受動的実体は結果を生じる実体がそこで結果を生み出す場だ⁽¹⁹⁾。」実体は原因だ。というのは、前節の規定された因果性のところではっきりしたように、つまり実体が同一性で、それが自己を否定した形で原因や結果となり、そのような結果から自己を回復することをやっているからだ。だから、実体は原因である。ここでは因果性が内属している基体はないのだ。因果性は実体が自己においておりなすものだ。因果性は実体の反省関係だ。実体が自己を二重化することだ。因果性は同一性に対立する形式規定ではなく実体そのものだ。因果性そのものが根源である。「基体は受動的実体であり、これを因果性が前提している⁽²⁰⁾。」

〔作用〕 この原因は結果を生じる。というのは、この原因は自己自身に対する否定的威力だからだ。同時にこの原因は自分の前提である。そこで原因は他者に対するように自己に対して作用する。—— こうして、原因はまずはじめに受動的実体が他在であることを揚棄し、受動的実体のなかで自己へと還帰する。第二に、原因は受動的実体を規定し、自己の他在を揚棄し、自己への還帰を規定性として措定する。この措定された存在が結果である。しかし、逆に原因は前提するものとして自己自身を自分の他在として規定するから、原因は結果を受動的実体のうちに措定したのだ。換言すれば受動的実体そのものは二重のものである。すなわち、自立した他者であり、同時に前提されたもので、しかもそれ自身として *an sich* すでに作用する原因と同一のものである。だから、原因の作用は二重のものだ。原因は規定された存在、すなわち原因の制約を揚棄すること、換言すれば受動的実体の自立性を揚棄すること——原因が受動的実体と自分が同一であることを揚棄し、そうして自己を前提あるいは他者として定立することとは、この二つのことは一つのもののうちにある。こうして、結果における受動的実体と最初の実体との同一性が、受動的実体のもとで外的に生起している、というように現象する。

この限り受動的実体は強制力をうける。強制力 *Gewalt* は威力 *Macht* の現象である。外的なものとし

ての威力だ。外的という意味は原因が結果において自己を措定するが、同時に前提するということ、すわち自己自身を揚棄されたものとして措定するということだ。だから、威力の他者への作用は自己への否定的関係だということになる。これが威力の顕現だ。受動的なものは自立的なものだが、しかし措定されたものである。自分自身のなかへと折り曲げられたものだ。現実性であるが、しかし制約でもある。制約である現実性だ。つまり、可能性にすぎない現実性だ。あるいは逆に即自存在の一つで、受動的な即自存在である。受動的なものがあることで強制力もある。威力は他者に対して強制力をもつことで自己を顕示し、また他者を顕示する。受動的実体は強制力によって真理として措定される。つまり、単一なる肯定的なもの、つまり直接的な実体にすぎないことが明らかになる。それゆえ、受動的実体は措定されたものだ。それが制約だということは、直接性の仮象である。因果性はこれをばざとる。

〔反作用〕 受動的実体はこうした強制力の作用を受けることでのみ自分の権利をうる。自分自身となる。このことで受動的実体は直接性を失うのみだ。疎遠な実体性を失う。受動的実体は措定された存在として規定される。それが受動的実体の固有の規定だ。だから、このことで受動的実体は揚棄されているのではなく、自分自身と合体するのだ。したがって、受動的実体は規定されてあることにおいて根源性である。

受動的実体は ① 能動的実体によって保持され、措定される。能動的実体が自己を揚棄された実体にするかぎりでのことだが。② しかし他方、受動的実体は自己と合致し、自己を根源的なものに、原因にする。他者によって措定されることと自己自身による生成とは同じことだ。

こうして受動的実体は原因となる。このことで ① 第一に結果が揚棄される。ここにおいて受動的実体の反作用が成立する。それは二重のものを含んでいる。一つは、受動的実体が即自的にあるということが措定される。二つは受動的実体が措定されたものとされ、しかもその即自存在として受動的実体が自己を表象している。受動的実体はそれ自体措定された存在だ。それゆえ受動的実体は他の実体によって自己のもとに結果をうる。しかしこの措定された存在は受動的実体固有の即自存在だ。だからこの措定された存在は受動的実体の結果だということになる。ここに受動的実体自体が原因となっている。

② 第二に、反作用は最初の結果を生じる原因に向けられる。しかし、原因は結果のなかにのみある。結果の揚棄は原因のもつ根源的な実体性の揚棄となる。このことは ① 原因自身によっておこなわれる。原因は自己を結果としているから。こうして原因のもつ否定

的規定が消え、原因は受動的なものとなる。② このことが以前は受動的であったが、いまや逆作用する実体によっておこなわれる。そして、この実体も自分の結果を揚棄する。原因は結果において自己自身と関係する。というのは、原因は制約で、前提されたもので自分の他者だからだ。

原因の結果を生じる作用は生成であり、他者を指定し、かつ他者を揚棄するからである。その他者とは自己自身だ。したがって、原因は結果において自己自身と関係することになる。

〔交互作用への移行〕 原因は受動的実体としてふるまう。しかし、この受動的実体はふたたび原因として生成する。ここに悪無限的進行が終結させられ、原因なる実体の作用と反作用による無限の自己への還帰が成立している。これが無限な交互作用である。

C 交互作用 Die Wechselwirkung

有限な因果性（形式的因果性）は原因と結果とが同一なものだという確認で終る。機械論（規定された因果性）は同一的なものへと還元することで終るのではなく、どこまでも原因と結果との無限進行として因果性をみようとする。交互作用では機械論が揚棄されている。というのは交互作用は ① 第一に形式的因果性や規定された因果性での原因・結果、つまり直接的なものの同志の因果、因果の外面性が消えている。② 第二に交互作用は原因の生成と原因が自己を否定することで自己と媒介するという根源性を含んでいる。

〔制約し合っている二実体の因果性〕 はじめに、交互作用は二つの実体の因果性だ。二実体とも他方に対して同時に能動的であり、受動的である。だから、区別は仮象である。区別は揚棄されている。それゆえ交互作用も空虚な様式だ。① 第一に互いに関係し合っているものは基体（物）ではなく実体だ。制約された因果性においてはいまだ残っていた直接性は揚棄された。原因を制約するものがあるとすれば作用の波及、自己自身の受動性だ。② 第二に、しかしこの作用の波及は他の実体、たとえば根源的実体から由来するものではない。作用の波及が至るそのものに由来する。作用の波及によって制約されているものから由来する。この作用の波及、つまりさしあたり外的なものは原因のもとに至り、原因の受動性の側面をなす。しかし、この外的なものは原因そのものによって媒介されている。つまり、この外的なものは原因の能動性によってもたらされたものだ。能動性によって指定された受動性だ。この因果性は制約され、制約している。制約するものは受動的なものだ。しかしまた制約されたものも受動的だ。「この制約すること、あるいは受動性は原因の自己自身による原因の否定である。というのは原因は本質的に自己を結果とし、まさにそのことで原因であるからだ。それゆえ、交互作用は因果性そのもの

だ。原因はたんに結果をもつだけでなく、結果において原因として自己自身と関係しているのであるからである⁽²¹⁾。]

〔絶対的実体〕 こうして、因果性はその絶対的概念に還帰している。同時に概念そのものに到達している。因果性は実在的必然性から始まった。その後の展開のなかでも、常々色々な形態での因果の区別があり、そしてそれらの因果性のなかから同一性が見つけられた。この同一性（必然性）は内的同一性である。因果性はこの内的同一性の顕現なのだ。こうして、実体が自己を外的な他者として原因となるというような因果性の仮象はもはやなくなった。こうして、因果性、必然性は自由へと高まった。——「交互作用において根源的因果性は自己を因果性の否定からの、すなわち受動性からの生成として、また受動性への消滅として、成として示す。しかし、この成は同時に仮象にすぎないのだ。他者への移行は自己自身への反省である。否定は原因の根拠だが、この否定は原因が自己自身となす肯定的合一である⁽²²⁾。]

交互作用のなかで必然性と因果性は消えた。それらには直接的同一性と因果として区別されたものの絶対的実体性とが含まれている。区別されたものの根源的統一が含まれている。つまり、絶対的矛盾を含んでいる。必然性は存在である。このことは存在が自己自身と統一されていることだ。存在は自己を根拠としている。だから逆に、存在は映現にすぎないともいえる。関係、媒介にすぎない。因果性は原因の指定された存在への移行でもあれば、また逆にその指定された存在の根源性への還帰でもある。ここに同一性がみられるのだが、それはなお内的必然性である。この内面性が因果性を揚棄する。こうして内面性が必然性として自己をあらわす。必然性は自由となる。その内面性が顕現されることによって。この顕現は区別された二つのものが一つになる運動だ。だから映現の自己への反省だ。偶然性も自由となる。というのは、必然性の両側面が同一化されるからだ。二つの同じ反省がある。ここに自己へと反省した二つの同一性（総体性）があるが、これらは同一な総体性である。これは同じ一つの反省の産物だ。ここに絶対的実体が登場している。

〔概念〕 絶対的実体は自己を自己から区別しているが、自己を自己からつきはなすことはない。また関係なき外的二実体へと別れることもない。絶対的実体は自己を二つの総体性へと区別はする。一方は普遍だ。それは以前の受動的実体が自己へと反省し、自己同一的なものとなり、根源的なものとなっているものだ。他方の総体性は以前の原因にあたるものだが、それが自己へと反省して、否定性という規定をもっているものだ。つまり、自己同一的否定性としてある。これが個別的なものだ。しかし、普遍的なものは規定性を揚棄

されたものとして保持している。否定的なものとしての否定的なもの〈否定的なものそのもの〉であることで普遍的なものは自己と同一的なものだ。だから普遍的なものは個別性と同じ否定性だ。個別性は普遍性と同じ同一性だ。規定されたものが再度規定されており、否定的なものが否定されてあるからだ。ここに両者が共に同一性であることになっている。これが特殊性だ。「だから、三つの総体性は同じ一つの反省だ。この反省は自己へ否定的に関係して、はじめの二つの総体性へと自己を区別する。しかし、これは完全に透明な区別への区別であり、すなわち同じ一つの同一性であるところの規定された単一性、あるいは単一な規定性への区別である。これが概念であり、主観性であり、自由の国である⁽²³⁾。」

(1) エンチクロペディーのなかでヘーゲルはこういっている。「論理的なものは形式上三つの側面をもっている。(イ) 抽象的側面あるいは悟性的側面、(ロ) 弁証法的側面あるいは否定的理性的側面、(ハ) 思弁的側面あるいは肯定的理性的側面である。」多くは認識の三段階説として理解されている。しかし、「論理的なものは……」であり、「論理学は……」ではない。しかも「三側面 drei Seiten」である。『大論理学』ではあらゆる段階で、この三側面が出てきている。本質論第三編ではこうだ。区別された悟性的諸規定(イ)が相互転化(ロ)し、それが第三のもの(ハ)に根拠づけられ、また第三のものもそれら諸規定を前提とし、それらを措定しかえすという叙述になっている。次のようにもいえる。方法は分析でもあれば総合でもある。抽象(抽出)でもある。普遍を見つけ、それを根拠に全ての諸規定を把握しかえす。

(2) 現実には現実性、可能性、偶然性、必然性、因果性、作用一反作用などの諸活動、相互転化、移行、交互作用としてとらえられる。それらを前提しつつもそれらを措定することで自己を存立せしめる実体(普遍)が根底にある。それは概念でもある。概念(実体)は自己を区別し、自己を他者とする。自己の中に他者を持ち、それを開陳、外化し、措定す。同時にそのまっただなかで自己である。普遍、概念、実体は矛盾そのものである。

現実が前提となり、その根拠、還帰点として、概

念(普遍、実体)がある。概念は現実を前提とする。しかし、それは概念である自己がつくったものだ。だから、現実概念へと還帰(反省)する。こうして概念は存立する。概念は前提によってつくられ、そして前提を措定しかえす。

(3) 現実とは活動である。社会的現実とは人間の前提であり、人間はそれに規定されている。「アンサンプル」である。しかし、社会的現実とは人間によって作りかえられる。人間はその意味で人間の活動主体であり、対象的活動性である。現実とは人間の活動の前提でもあればその所産でもある。一般的にいえば、自然科学を含めた認識全体も同じ構造のもとにある。

注

- (1) ヘーゲル『大論理学』2 寺沢訳(文社)148頁
Hegel, „Wissenschaft der Logik“ 2 (Suhrkamp 版) S 125 (以下同様)
- (2) 武市『ヘーゲル論理学の世界』中(福村出版)845頁
- (3) ヘーゲル『大論理学』2, 225頁, S 192
- (4) 246頁, S 211
- (5) 247頁, S 212
- (6) 250頁, S 215
- (7) 251頁, S 215
- (8) 251頁, S 216
- (9) 253頁, S 217
- (10) 256頁, S 220
- (11) 259頁, S 222
- (12) 261頁, S 223
- (13) 262頁, S 224
- (14) 266頁, S 229
- (15) 268頁, S 231
- (16) 434頁, 注54
- (17) 271頁, S 234
- (18) 271頁, S 233
- (19) 436頁, 注62
- (20) 272頁, S 234
- (21) 277頁, S 238
- (22) 277頁, S 239
- (23) 279頁, S 240